基　調　報　告

愛知教職員組合連合会

佐藤教育担当

これまでの71次にわたる教育研究において、わたくしたちは夢と希望あふれる教育の創造をめざし、子どもたちを中心にすえ、それぞれの学校・地域の特色を生かした、自主的・主体的な教育研究活動を着実に積み重ねてきました。また、各種調査でいただいた声をもとに、今日的な教育課題を明らかにするとともに、各地域で教育対話集会などを行い、保護者や地域の方々と意見交換をする中で、子どもたちの「生きる力」を育む取り組みについての合意形成をはかってきました。そして、各学校では子どもたちの健やかな成長を願い、日々教育活動に取り組んできました。

さて、学校現場では、学習指導要領の改訂による「特別の教科　道徳」「外国語教育」「プログラミング教育」などへの対応に加え、GIGAスクール構想によって整備された一人1台の端末を効果的に活用することが必要とされています。このような政府主導のさまざまな教育改革が矢継ぎ早に推しすすめられているときだからこそ、子どもたちを中心に据えた教育改革を学校現場主導で行っていくことが必要です。しかしながら、学習内容や授業時数の増加により、子どもたちのゆとりが奪われるばかりか、子どもたち一人ひとりと向き合う時間を確保することも難しくなり、ゆきとどいた教育が十分に行えなくなることが危惧されます。子どもたちに必要な力は、自ら課題を見つけ、主体的に判断し、行動できる「生きる力」であり、それは、ゆとりとふれあいを保障する教育課程の中で育んでいくべきものであると考えます。

わたくしたちは、あくまでも学習指導要領を大綱的基準としてとらえ、未来を担うすべての子どもたちのために夢と希望あふれる教育を創造する取り組みを継続し、学校現場からの教育改革を推進していかなければなりません。そのためにも、基礎・基本の確実な定着はもちろんのこと、子どもたち一人ひとりが学ぶ意欲をもち、自らすすんで取り組む、より質の高い学び

を大切にしていかなければなりません。また、人・自然・文化などとかかわり合い、地域に根ざした体験活動を中心にした学習を構築し、学校・家庭・地域の連携をよりいっそう強化し、協働して、地域ぐるみの教育を推しすすめていかなければなりません。

今次の教育研究活動においても、ゆとりとふれあいの中で「わかる授業・楽しい学校」の実現をめざし、「学びの質をより追究するとともに、子どもたち一人ひとりの意欲を大切にし、学ぶ喜び・わかる楽しさを保障する教育課程編成活動をすすめる」「学校・地域の特色を生かし、家庭や地域社会と協働をはかりながら、人・自然・文化などとのかかわりを大切にした創意あふれる教育課程編成活動をすすめる」の2点を研究推進の重点として提起しました。わたくしたちがすすめる教育改革は、日々の教育実践を積み重ね、その中で成長していく子どもたちの姿で示すべきであると考えます。各分科会においては、実践研究の報告をもとに、活発な議論を展開するとともに、その成果を各単組・分会に持ち帰り、還流をはかっていただくことを大いに期待します。

また、本日の全体会の後には、各分科会会場で行われている研究発表や討議の様子をみなさま方に参観していただきたいと思います。愛知県内の優れた教育研究にふれていただくことで、本日ご参集のみなさまとよりよい教育についてともに考え、共通理解をはかる場にしたいと考えています。

最後になりましたが、この教育研究愛知県集会が愛知の教育のさらなる推進のため、そして何よりも目の前の子どもたちの健やかな成長のために、実り多いものとなることを祈念し、本集会開会にあたっての基調報告といたします。

第72次教育研究愛知県集会 分科会概要報告

第 1 分科会【国語教育】

文学その他

1. 全体を通して

文学的文章と説明的文章を合わせて23本のリポートが報告された。子どもたちの実態に応じて、何のために、どのように読む力をつけさせるべきか討論が展開された。

2. 討論の内容

〈読む活動を通して、どのような力を身につけさせるのか〉では、問題発見と問題解決を目的とした実践や、現代社会で生き抜くための言語能力を育てる実践が多く報告された。

討論では、読む力を国語の授業の中にとどめるだけでなく、他の教科に生かしたり、実生活に還元したりすることの必要性について話し合われた。

〈読む力を高めるための教材の選び方について〉では、知識・技能を身につけたり、それを活用できるか検証したりするために教科書教材以外の物語を用いた実践や、子どもたちの実態に応じて、自主教材を開発した実践が報告された。

討論では、教材の形式面と内容面の両方の価値について話し合われた。身につけさせたい力をその教材でとらえられることに加え、子どもたちが楽しいと思えることや、親しんで取り組めることなど、具体的な価値について意見交換がされた。

〈読む力を高める指導の工夫について〉では、ICT機器を活用して読み深めたり、意見を共有したりする手だてが報告された。また、親しみにくい教材への導入の工夫や、子どもたちが課題に対して協働的に取り組むための工夫が報告された。

討論では、ICT機器と従来の方法、それぞれの適切な活用の仕方や、集約したり、共有したりした子どもたちの思考をどのように還元していくかについて意見交換がされた。また、主体的に学ぶ子どもたちに対する声のかけ方や、支援の方法について話し合われた。

〈読む力を高める対話的な学びのあり方について〉では、ペア活動やグループ活動といった話し合いの形式に加え、ジグソー法やビブリオバトルなどさまざまな形態の対話的な学びのあり方が報告された。

討論では、子どもたちが対話をすすめるときの教員の支援や指導のあり方について話し合われた。

3. 今後に残された課題

(1) 紙媒体による活動とタブレット端末などのICT機器の活用による活動のよりよいバランス
(2) 子どもたちが考えを形成し、対話に参加できるようにする工夫
(3) 自立した学習者を育てるための授業づくり

作文その他

1. 全体を通して

作文（綴り方）の教育6本と、言語の教育3本、音声表現の教育4本のリポートが報告された。子どもたちの実態を見つめ、文字言語・音声言語の特徴を生かして、どのような力を育てていくのかについて討論が展開された。

2. 討論の内容

(1) 作文（綴り方）の教育

〈何のために・何を〉

「学習の見通しをもたせるための手だてや支援の方法」を柱として討論が展開された。

体験したことをリーフレットにまとめて、地域の人に伝える実践や、身近な学校生活のことをテーマに、説得力のある意見文を書く実践が報告された。

討論では、子どもたちの書く意欲を高めるために、目的や伝える相手を意識させることの重要性が確認された。

〈何を・どのように〉

「書く意欲を高めるための手だてや支援の方法」などを柱として討論が展開された。

子どもたち自身に学習課程を選択させる実践や、考えを豊かに表現するために、シンキングツールを活用した実践などが報告された。

討論では、選んだり書いたりすることに支援を要する子どもへの対応や、一人一台端末を効果的に活用していくことが確認された。

助言者からは、シンキングツールを教員から与えるだけではなく、子どもたち自身に選ばせることや、評価意識をもたせることの大切さについての助言を得た。また、教員は育てたい子ども像にせまるため、子どもたちの実態を見抜く力が必要であるとの助言を得た。

(2) 言語の教育

書写の学習を他教科の学習とも関連させることで、学びを日常に生かすことをめざした実践や、対話的な活動を取り入れて、行書の筆づかいを意識させることをめざした実践などが報告された。

⑶　音声表現の教育

〈何のために．何(なに)で〉

「音声言語の特徴を生かした手だてや支援の方法」を柱として討論が展開された。全校生徒にむけてスピーチすることを目標に、話すスキルを高めることをめざした実践などが報告された。

〈何を・どのように〉

情報を多面的にとらえるために、思考ツールを活用した実践や、話し合いに大切な技能を身につけさせるために、振り返りを大切にした実践が報告された。

討論では、スピーチモデルを見せることの有効性について話し合われた。

助言者からは、音声表現の教育に限らず、子どもたちに振り返りをさせる際には、身につけた力を今後にどう生かすのかを考えさせることが大切であるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　表現の指導において、どのような子どもを育てていきたいのかを明らかにした上で、表現と認識の統一をめざしていくこと

⑵　文字言語・音声言語それぞれの特徴を生かした目標と評価方法を明らかにしていくこと

第 2 分科会【外国語教育】

1. 全体を通して

「主体的に学習に取り組む態度を育む指導のあり方」「コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む言語活動のあり方」「思考力・判断力・表現力を育む言語活動のあり方」の三つを討論の柱とし、小グループによる発表と討論が行われた。各グループから出された「全体討論への投げかけ」をもとに、全体での討論と意見共有が行われた。

小グループでは、主体的・協働的に学び、自分の考えを伝えることができる子どもたちの育成をめざした小学校の実践や、中間交流を位置づけ、主体的に考えながら表現することができる子どもたちの育成をめざした中学校の実践などが報告された。子どもたちがお互いにかかわり合いながら、主体的に学習活動に取り組むための手だてが数多く報告され、活発な討論が行われた。

2. 討論の内容

⑴　主体的に学習に取り組む態度を育む

単元の時間配分や評価方法の工夫について討論が展開された。子どもたちが挑戦する機会を設けることや目標にむけた過程を自分で決定させることなど、参加者から多くの意見が出された。

助言者からは、自己調整力を高めることが大切であり、ICT 機器などを活用して振り返ることや、次の目標を設定し、学習に取り組んでいくことが必要であるとの助言を得た。

⑵　コミュニケーションの基礎となる資質・能力を育む

コミュニケーション力を高めるために、場面設定を明確にし、継続して取り組むことが大切であると確認され、そのための手だてについて意見交換がされた。会話を続けようとする姿勢やリアクションをとることの大切さなどがあげられた。

助言者からは、目的・状況・場面の設定を明確にし、学習を積み重ね、即興性を身につけることや聞く側の姿勢を育てることが大切であるとの助言を得た。

⑶　思考力・判断力・表現力を育む

表現力を高めるための手だてについて意見交換がされた。「言えない語の反復練習をする」「教え合い、グループで解決する」「具体的な場面を設定し、話したいという意欲を高める」などの手だてがあげられた。

助言者からは、がんばる・自信をもつ・立ち向かう・協力する力などの非認知能力を育てていくことが大切であるとの助言を得た。

⑷　全体討論

小グループから出された「全体討論への投げかけ」をもとに、ICT 機器の活用方法や、即興性を育む手だて、コミュニケーション活動での正確性について、それぞれの実践をもとに活発な議論がされた。

3. 今後に残された課題

⑴　ICT 機器を活用した授業展開での個別最適化

⑵　小学校と中学校との連携

第 3 分科会【社会科教育】

小　学　校

1. 全体を通して

地域素材を活用した実践や対話的な活動を通して互いの考えを交流する実践、思考ツールやICT機器を有効に活用しながら課題を追究する実践が報告された。

討論では、「よりよい社会の実現をめざし、主体的に考えるための学習活動の工夫」や「身近な事象を教材化した学習活動の工夫と育てたい力」、「先人の働きや政治の役割を、切実感をもって追究できる学習活動の工夫と育てたい力」などについて、それぞれの実践にもとづいて、活発な質疑と柱に沿った議論がなされた。

2. 討論の内容

⑴　国土・産業学習

地域的な特徴を的確にとらえ、子どもたちが切実感をもって主体的に課題を追究する実践や、子どもたちが調べたことをもとに多角的に考え表現したり、ICT機器や思考ツールを活用したりして考えを深めたりする実践などが報告された。

討論では、よりよい社会の実現をめざし、主体的に考えさせるための学習活動の工夫について話し合われた。助言者からは、課題や教材に切実感をもつなど、子どもたちの主体的な姿を具体的にとらえる必要があるとの助言を得た。

⑵　地域学習

自分たちの住む町の変遷や、そこに暮らす人々の願いについて知ることで、追究する意欲を高め、主体的に取り組ませる実践や、課題解決にむけて思考ツールやワークシートを活用して、自分たちにできることを考える実践などが報告された。

討論では、身近な地域素材となる資料や、ゲストティーチャーを子どもたちの思考の流れに合わせて出会わせたり、疑問をもたせたりすることで、効果的な教材になることが確認された。助言者からは、地域素材を活用することで、子どもたちは学習課題を自分事としてとらえ直したり、学びを深めたりすることができるとの助言を得た。

⑶　歴史・公民学習

戦争体験者のインタビュー映像や具体物を使った疑似体験から歴史的事象を身近なものとしてとらえさせる実践や、地域社会のあり方について資料やゲストティーチャーを活用したり、調査活動や対話的な学習を通したりして、よりよい社会づくりへの考えを深める実践が報告された。討論では、子どもたちが先人の働きや政治の役割を、切実感をもって追究することで、どのような力を身につけていくのか話し合われた。そして、子どもたちが主体的に学習できるようにすることが、確かな社会認識を育むために重要であると確認された。助言者からは、よりよい社会をつくろうとする人々や、その思いと出会いながら学習活動を行うことが重要であるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　子どもたちが切実感をもって主体的に追究するための教材や学習活動の工夫

⑵　加速度的に変化する現代社会の中で、よりよい社会の実現のための社会科学習のあり方

中　学　校

1. 全体を通して

地域ごとに異なる課題を生かし、自分事としてとらえ、仲間と共に課題を追究する実践や、歴史的事象を的確にとらえ、自分の考えを比較したり、練り直したりする実践、身近な社会問題を取り上げて、対話を重視しながら、多面的・多角的に問題を把握し、課題解決をはかり、社会参画意識を高める実践が報告された。

県内18本のリポート報告をもとに、子どもたちにとってよりよい学びをめざし、学習活動のあり方や教材開発の工夫などについて積極的に質疑や討論が行われ、確かな成果と次年度への課題が浮き彫りとなった。

2. 討論の内容

全体を通して、質疑や討論の中で、「予測困難な時代に子どもたちが未来を創造できる社会科学習のあり方」について多く議論された。

⑴　地理的分野

子どもたちの学ぶ意欲を高める学習活動のあり方や、教材開発の工夫について話し合われた。その中で、地域を学習し、社会的事象と実生活との関連性に着目した学びができるよう、ICT機器の活用による視覚化や地域素材の利用の大切さが確認された。また、子どもたち自らが課題を追究し続けられることの重要性についてもふれられ、子どもたちの思考が連続し、切実感が高まる授業展開の重要性について議論された。

⑵　歴史的分野

子どもたちが切実感を高め追究することの重要性について議論され、さまざまな立場から考えることで、先人の働きを理解できることが確認された。また、子どもたちが、事実を丹念にとらえて価値判断をすることで、子どもたち自身が時代の当事者としての自覚をもち、歴史的事象に確かな考えをもつことの重要性が確認された。

⑶　公民的分野

社会参画の意欲を高めるための学習活動のあり方について議論がなされた。当事者意識を高めるためには、身近な課題と生活とのつながりに気付き、課題解決にむけて追究する中で意思決定の機会を設けることの重要性が確認された。ゲストティーチャーの話を聞いたり、模擬裁判を行ったりする事例も報告された。

また、子どもたちの課題解決への意欲が持続できる教材の重要性についてもふれられ、子どもたちと教員が単元の中でめ

ざす世の中の姿や、そのために必要な要素を明確にして追究を行うことで、主体的に課題解決にむかう姿が期待できることや、社会参画への意欲も高まることが確認された。

⑷　指導・助言

助言者からは、何が重要か、子どもたち自身が考えることが社会科であるとの助言を得た。教員主導ではなく、子どもたち自身が課題を生み出し、子どもたちが主役となり追究し続ける授業の重要性が再確認された。

3. 今後に残された課題

⑴　予測困難な時代に、子どもたちが未来を創造することができる社会科学習のあり方

⑵　子どもたちが主体的に考えるための学習活動の工夫

第 4 分科会【数学教育】

算　　数

1. 全体を通して

「主体的な学び」「思考力・判断力・表現力の育成」「対話的な学び」の三つの柱立てで、実践の報告が行われた。

実生活に即した教材や、一人一台端末を活用して主体性を育む実践、キーワードの提示や板書の工夫によって数学的な見方・考え方を働かせながら活動に取り組む実践、視点を与えて対話を行うことで考えを深めることをめざす実践などが報告された。

どの報告も、実態をもとに、子どもたちの力をのばしたいというねらいを感じるものばかりであり、質疑討論では提案に対して多くの内容が話し合われた。

2. 討論の内容

⑴　主体的な学び

実生活に即した教材を扱って単元を構成することで興味をもたせる実践や、一人一台端末を活用して主体性を引き出す実践などが報告された。

討論では、主体性を引き出すための教員の働きかけや、ICT機器の効果的な活用の仕方などについて話し合われた。

助言者からは、身近な問題場面を設定して現実的課題をもたせ、子どもたちの思考に合わせたアプローチを考えることや、ICT機器の活用によって思考過程を可視化することの大切さについて助言を得た。

⑵　思考力・判断力・表現力の育成

解決の糸口となるキーワードの提示や板書の工夫によって、子どもたちが数学的な見方・考え方を働かせる実践や、一人一台端末や吹き出しを用いて子どもたちの思考を可視化させる実践などが報告された。

討論では、子どもたちが自分の考えを整理し、深めるために、教員がどのようなタイミングでどのように支援するとよいかについて話し合われた。

助言者からは、既習事項をもとに考えの根拠をもつためには、本時で考えた内容を振り返る活動を毎授業繰り返し行うことが大切であるという助言を得た。

⑶　対話的な学び

小グループの組み方や対話における視点の与え方を工夫した実践、学習の成果を認め合う場を設定して学び合うよさを味わわせる実践などが報告された。

討論では、対話のねらいや場の設定の仕方、対話が苦手な子どもへの支援などについて話し合われた。

助言者からは、話し合いや振り返りの活動において子どもたちに視点を与えたり、関心をもたせたりすることの重要性や、低学年の頃から話し合ったり学習したことを振り返ったりする経験を積み重ねることの重要性について助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　一人一台端末の効果的な活用の仕方や教員の支援の仕方

⑵　教科の特性と社会性が混じる話し合い活動において、発達段階に応じて何を大切にしていくとよいか

数　　学

1. 全体を通して

「主体的な学び」「思考力・判断力・表現力の育成」「学び合う力の育成」の三つの柱立てで、実践の報告や討論が行われた。

数学的活動を通して、子どもたちの自主性を引き出した実践をはじめ、自分の考えを深めることや表現する力を高めることをねらいとした実践、グループ学習やペア学習などの学習形態を工夫した実践などが報告された。

2. 討論の内容

⑴　主体的な学び

操作活動や実生活から数学的な問題を発見することで、興味をもって課題を追究する実践や、理解度に合わせた学習課題を設定したり、振り返りを工夫したりすることで、理解を深めさせる実践、学習形態を工夫することで対話の質を向上させ

る実践などが報告された。

討論では、子どもたちの主体性を引き出すための方法について話し合われた。話し合い活動を行う際や、学習につまずいている際の教員の働きかけ方などについて意見交換された。

助言者からは、既習事項が本時以降のどの場面で生かされていくかの見通しをもって、単元全体での教材研究を行うことが大切であることや、学習内容を焦点化していく中で、ICT機器を適切に使うことが不可欠であり、どのように使っていくかを模索する必要があるとの助言を得た。

⑵　思考力・判断力・表現力の育成

既習事項とのつながりを明確にし、発問を工夫することで、数学的な思考力を育てる実践や、多様な考え方が出る問題を利用して意見交流し、表現力を高める実践、単元を通した学びの変容から問題をよりよく解決できることを実感できる実践などが報告された。

討論では、数学を苦手とする子どもに対しての働きかけや、表現力と思考力の高まりについて話し合われ、すべての子どもたちが学習に参加する方法について意見交換された。

助言者からは、表現力を高めていく上で、いかに子どもに自信をもたせていくかが大切であること、特に、数学を苦手とする子どもが自信をもって発言するために行う教員の働きかけの必要性について助言を得た。

⑶　学び合う力の育成

ペアやグループで話し合った内容を他のグループに説明する活動を行うことで、互いに学び合い、考える力を高める実践や、一人一台端末を活用して考えを共有することで、できる喜びを実感できる実践などが報告された。

討論では、子どもたちと教員や、子どもたちどうしのかかわり方を中心に話し合われた。評価への反映方法や、ペア・グループ活動が停滞しているときの教員の働きかけについて意見交換された。

助言者からは、個で考える場があるからこそ、ペア・グループ活動が生きていくこと、他者とのかかわりの中で、一方的に教えるだけでなく、逆方向もできるように働きかけていくことが大切であるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　主体的な対話を引き出すための指導法及び教材の蓄積
⑵　意見を共有・交流させる工夫
⑶　ICT機器の強みを適切に取り入れた授業展開の追究

第 5 分科会【理科教育】

物理・化学

1. 全体を通して

身の回りにある事象や意外性のある事象を教材として提示し、興味・関心を引き出したり、教具やICT機器の利用を工夫することで子どもたち自身の考えにゆさぶりをかけたりしながら、主体的に学習課題を追究するための工夫を凝らした実践リポートが、小学校で物理6本・化学6本、中学校で物理4本・化学8本報告された。

2. 討論の内容

報告の区分ごとでの討論や、全体を総括した討論においては、柱とする四観点をもとにして、実践リポート報告者間で意見や情報の交換が活発に行われた。特に、次の二観点に重点がおかれ、教材の取り扱いの具体や指導の工夫事項の紹介が話題にあがった。

⑴　自然事象を、量的・関係的な視点や質的・実体的な視点でとらえさせる指導方法

小学校の実践リポートでは、音の正体が振動であることを糸電話や発泡スチロール球などを用いて、視覚的にわかりやすくとらえる実践が報告された。また、中学校の実践リポートでは、目に見えない物質粒子をカラー凡天（手芸用の小球）に置き換えて可視化させ、状態の変化をとらえる実践が報告された。

討論では、子どもたちに粒子イメージを育むために有効なモデルを用いた指導方法に関して、リポートの実践例を取り上げながら、質疑応答や、教材の紹介が行われた。また、学びの視点を定めて教材の利用を工夫することや、ICT機器の活用により記録された事象間の比較や関連づけを促す環境を整えて、子どもたちの気付きや思考を交流させることが、ゆたかな学びを促進させると再確認された。

⑵　子どもたちの理科的な資質・能力の把握や育成に役立てる評価の利用

中学校の実践リポートでは、自然現象から生じた疑問に対して、ICT機器を活用した電気泳動の実験から、電荷によるイオンの移動の理解へつなげていく実践が報告された。

討論では、評価において、子どもたちの考えの変容を追う重要性が話し合われ、チャット機能での考えの交流は、集団による学習場面の記録に有効だが、個人追究の場面とは分けて活用していく必要性が再確認された。資質・能力の育成に役立てるため、子どもたちの考えの足跡を目に見える形で残す手段として、従来のワークシートなどに加え、ICT機器を効果的に活用した図や絵、写真や映像などの保存データによっても評価が可能になることも確認された。

⑶　助言者から

子どもたちが「理解度・学びの変化・次に学びたいこと」などを振り返る場において、教員が指導の意図を明確にすることで、子どもたちが何に着目し、何にもとづき、どのように考え、意見交換をすべきか、明確になるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　子どもたちが学びに向き合うための目的に見合った教材の工夫
⑵　身近な事象を学習と関連づけることで、子どもたちの興味・関心を高め、既習の理科の見方・考え方や科学的知識を用いて、学習課題や実験への見通しを立て主体的に解決するプロセスがすすめられるための工夫
⑶　教員が単元や授業の目標を十分に分析し、教材を効果的に活用できる場面を設定すること

生物・地学

1. 全体を通して

露頭観察・昆虫採取・植物の断面の観察など自然の事物・現象との出会いの工夫や、一人一教材・一枚ポートフォリオなど学びを個に返す工夫を通して主体的に学習に取り組む実践が報告された。また、チーム学習・樹形図などを活用して協働的に学習に取り組む実践が報告された。

討論では、柱に設定された四観点のうち、特に「子どもの理科的な資質・能力を育成するための理科指導のあり方」と、「身近な自然や、生命の大切さを取り入れた単元構成の充実」について意見交換が活発に展開された。

2. 討論の内容

⑴　子どもの理科的な資質・能力を育成するための理科指導のあり方

生物分野や地学分野において、学校や地域など身近なものを取り入れたり、具体物やモデルを活用したりすることで、子どもたちの疑問・好奇心・感動を引き起こして、問題を見出しながら科学的に追究・探究することが大切であるという考えが出された。生物分野において、鶏の手羽先・豚の心臓や小腸を観察して生物の体のつくりについて学習するという実践例が紹介された。また、地学分野において、岩石を砕いて化石を採取して地層について学んだり、シミュレーションソフトを活用して天体を観察したりする実践例が紹介された。

⑵　身近な自然や、生命の大切さを取り入れた単元構成の充実

生物分野では、人と動植物とのかかわり、生命の美しさ・感動について意見交換された。その中で、メダカを卵から育てて生命の神秘さについて実感する実践例が紹介された。また、地学分野では、自然の事物・現象のスケールの大きさ、過去を知ることで未来を考えることにつながることが報告された。その中で、地域の土地の様子について学ぶことで、起こりうる自然災害を想定するなどのアイデアが出された。

⑶　助言者から

「既習の内容や生活経験を活用して解決できる課題に対して協働的に学習するという学び合いを通して、すべての子どもたちにとって学びとなるように授業デザインをすることが大切である」ことや、「理科の見方・考え方を働かせることや生物・地学を学ぶ意義や生命観、地球観を教員がもった上で授業の構成を考えていくことが大切である」こと、さらに、「子どもたち自身が主体となった学習を行うには、丁寧な見取りと的確な支援が必要である」などの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　自然の事物・現象との出会いにおける具体物と一人一台端末などのICT機器の活用やかかわり方
⑵　考えを広げ深めるための対話的活動の工夫
⑶　発達段階をふまえた上での理科の見方・考え方を働かせる授業デザイン
⑷　探究の重要性

第 6 分科会【生活科教育】

1. 全体を通して

栽培活動、学校探検や町探検、自然遊びなど、多岐にわたる報告が行われた。「かかわり」が重視される生活科において、コロナ禍での実践はさまざまな制約の中で行われていたが、どの実践も子どもたちの思いや願いをもとに、指導者が試行錯誤を繰り返しながら、今できることの中でめざす子ども像に迫る手だてについて数多く報告された。

討論では、体験活動を充実させる工夫、困り感のある子どもへの効果的な支援や声かけなどの視点から、活発な議論が展開され、たいへん有意義な時間となった。

2. 討論の内容

⑴　栽培活動を通して

単元を通して意欲を持続させる支援や、間引きや収穫での子どもたちの葛藤、話し合いをする中で揺れ動く心の様子がうかがえた。自分の育てた花や野菜の成長を喜ぶ先に、情意的な側面での気付きも多く得られることが明らかになった。

⑵　学校探検や町探検を通して

身近な人と気付きや考えを伝え合うことで、学校や地域の魅力に気付くとともに、自分自身の成長にも気付いていく実践が多数報告された。学校職員や地域の方々との交流により、さらに学校や地域への愛着が深まる様子も明らかになり、探検活動のよさが改めて確認された。

⑶　自然遊びを通して

子どもたちが身近な自然に親しみをもち、夢中になって活動することでたくさんの気付きを得たり友だちと相談しながら遊びを考えたりする実践が報告された。自由に取り組むことができる環境の整備や、教材の工夫が重要であることが確認さ

れた。また、友だちとかかわることで、よりよいものにしていこうとする子どもたちの姿が明らかになった。

⑷　おもちゃづくりを通して

子どもたちがつくったり試したりしながら友だちとかかわり合い、気付きを高めていく実践が報告された。また、自然遊びと同様、環境づくりや教材の工夫が重要であることが確認された。

⑸　家庭生活にかかわる活動を通して

家庭での手伝いをする活動を通して、家族の一員としての自覚が芽生えたり、家族の役に立つことができた自分に気付いたりする実践が報告された。家族構成についての配慮、家庭への協力要請など、子どもたちへの配慮や各家庭への働きかけが重要であることが確認された。

⑹　総括討論

生活科を通してどのような力を身につけさせたいか、どのような体験や活動を行うとよいかというテーマで話し合った。

生活科の学習を通して、自分自身の成長に気付くための活動の振り返り方について多くの意見が出された。中でも、身近な他者と対話をする、昆虫や植物、キャラクターになりきって自分へのメッセージを書くなど、メタ認知を意識した振り返り活動のアイデアが出された。

助言者からは、学習履歴を活用して自分自身の成長に気付かせる工夫などについて助言を受けた。

また、子どもたちに適度な困り感を残すことで、新たな問いを見出したり、思いや願いを膨らませたりすることにつながるなど、主体的に学ぶことができるようにすることの大切さを確認した。

3. 今後に残された課題

⑴　指導と評価が一体となるような活動計画と、子どもたちの気付きの見取り方

⑵　体験活動を充実したものにするためのICT機器活用の工夫

第 7 分科会【美術教育】

1. 全体を通して

「美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと～子どもたちのゆたかな学びのために～」をテーマに実践報告や討論がすすめられた。

総括討論では、自己の表現を他者に伝える場を設定することは、自らの表現を見つめ直したり、周りから認められて自信につながったりするきっかけになるため、大切であると確認された。他方、課題に対して解決に至るまでの過程が大切であり、その過程において、自ら根拠をもって選択・決定をすることが、子どもたちの生きる力につながり、美術教育を通して伝えたいことの一つであるという意見が出された。

2. 討論の内容

⑴　子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫

オリジナルの教具を用いて作品の視点を絞り、一つの表現に注目しやすくする工夫や、自らの成長を実感し、自信をもって活動を継続していくために、一枚のポートフォリオシートに毎時間振り返りを行う実践、自らの見方や考え方の幅を広げるために、さまざまな表現方法の自画像と出会わせる実践などが報告された。

討論ではアイデアが浮かばなかったり、自信がもてなかったりする子どもへの手だてや、教具の工夫についてや、ICT機器やインターネットの情報を活用する際の留意点などについて、それぞれの実践をもとに活発な議論がなされた。

⑵　コミュニケーション活動を通して、発想や表現を広げる実践

試行錯誤しながら、よりよい作品にむけてデザインを追究する意欲を高めるために、ペア学年の思いを構想のきっかけにして工作を行う実践、全学年を縦割りにした班で、お互いの作品を紹介し合う鑑賞を通して、友だちとのつながりを深めたり、互いのよさや違いを認め合ったりする実践、仲間とかかわりながらの共同制作を通して、新たな発見や考えを深めるために、学校の伝統的な行事にむけて、クラスで横断幕をデザインする実践などが報告された。

討論では、グループ活動における、友だちとのかかわらせ方の工夫や手だてについてや友だちとのかかわりを通して、さまざまな作品やアイデアの魅力にふれたり、他者との違いにふれ、受け入れたりすることの大切さについて、それぞれの実践をもとに活発な議論がなされた。

助言者からは、子どもたちはもちろん、教員もものづくりを楽しんで取り組むことが大切であり、何を身につけさせるのか意図を明確にもって題材選びや鑑賞活動をすすめることが必要であるとの助言を得た。また、中間鑑賞の場や、目標の達成基準の設定により、子どもたちの意欲向上や、深い学びにつながっていくとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　目的や身につけさせたい力を明確にした上での題材決定や鑑賞活動の工夫

⑵　強いこだわりや、自らの思いや考えを言語化できない子どもへの支援の工夫

第 8 分科会【音楽教育】

1. 全体を通して

音楽教育部会では、音楽表現などを通して子どもたちの変容をよりわかりやすくとらえるために、DVDによる動画発表という形ですすめられた。全体を通して、GIGAスクール構想の広がりに伴ったICT機器、特に一人一台端末を活用した実践が多く報告された。さまざまな実践が報告される中で、子どもたちが実際に音楽表現をする場面での、いきいきとした表情が印象的だった。ICT機器の活用はすすめつつ、実際に楽器にふれる場面、地域との連携をもとに、地域のお祭りのお囃子や太鼓を経験する活動も大切にしたいという報告があった。

2. 討論の内容

⑴ 他教科・領域・地域の特色と関連させた音楽教育のあり方

他教科・領域との関連については、中学校よりも小学校、小学校の中でも、高学年よりも低学年の方が、関連させやすいという意見が多かった。地域のお祭りのお囃子、太鼓を地域の方から教えてもらい、保護者や他学年に披露する実践や、生活科の学習と関連させて、楽器をつくり、その楽器で下級生と遊ぶ実践が報告された。

中学校では、国語科との関連で歌詞の研究、また家庭科との関連で、歌えるマスクの製作という実践が紹介され、実物も紹介された。一般的なマスクと違い、バンダナを鼻に巻くような形で、下部分は固定されないものの、鼻から鎖骨のあたりまでの長さになっており、一般的なマスクよりも息苦しさがなく、歌いやすい構造になっていた。

⑵ 音楽教育におけるICT機器などの効率的な活用方法

各自治体で、採用されている学習アプリに違いはあるものの、どの分会からも積極的な活用実践が報告された。教員がリコーダーの模範演奏をしている動画や、練習用の伴奏音源を配付し練習させる活動では、配付された動画や音源の再生速度を調整し、自分に合った速度から練習を始め、録音・録画機能を使って自分の演奏をチェックさせていた。学習進度を知るために子どもたち自身に自分の動画を撮影させ、教員に提出させていた。教員は一人ずつの動画をチェックし、コメントをつけて返信するという実践が報告された。

鑑賞の活動においては、音楽を形づくっている要素に着目させるために、くらげチャートなどの思考ツールを用いて着目すべき要素を意識させたり、アプリを使って子どもたちの考えを共有させたりするといった活用例が報告された。他には、学習支援ソフトで制作したリズムゲームを用いて楽しく競わせながらリズム感覚を養う活動の報告もあった。

3. 今後に残された課題

⑴ 子どもたちの主体的な音楽表現につながるICT機器の効果的な活用

⑵ コロナ禍における、音楽教育と地域とのかかわり

第 9 分科会【技術教育】

1. 全体を通して

「材料と加工の技術」「生物育成の技術」「エネルギー変換の技術」「情報の技術」の四つの柱立てで実践の報告や討論が行われた。

技術科の目標とめざす資質・能力の実現にむけて、話し合い活動や題材を工夫することで、技術の見方・考え方を働かせる実践など、11本のリポートが報告された。

総括討論では、「学習に対する子どもたちの意欲を引き出したり、高めたりするための問題設定や提示方法の工夫」について話し合われた。

2. 討論の内容

⑴ 材料と加工の技術

自信をもって製作に取り組めるように大切なポイントを学級全体で共有できるようにした実践や、試作した製作物を試したり、他者の製作物と比較したりすることで問題を見出し解決できるようにした実践が報告された。

討論では、工具を用いた作業の正確性の判断基準や一人ひとりの不得意な理由を把握することの大切さについて話し合われた。また、構想した製作物の問題点や生活に潜む問題点などについて、問題解決の視点を明らかにすることの重要性が確認された。

⑵ 生物育成の技術

よりよい作物を栽培するために品質や収量の向上をめざした実践や、栽培方法や育成方法を比較しながら問題解決に取り組む実践が報告された。

討論では、「よりよい」の定義をどのようにとらえるのかや生産者と消費者の双方の視点で見方・考え方を働かせることの大切さについて意見交換された。また、地元の特産品を題材にすることで子どもたちの関心を高める工夫について話し合われた。

⑶ エネルギー変換の技術

チーム学習を取り入れることで新たな視点に気付かせ、学習を深められるようにした実践が報告された。

討論では、チームで効果的に学習を深められるように子どもたち一人ひとりの意欲や満足度などを測定する検査結果を活用したチーム編成の工夫や、チーム内の議論の質を向上させるためのファシリテーションの工夫について話し合われた。

⑷ 情報の技術

チャットアプリの開発や自動運転など、試行錯誤しながら課題解決に取り組むことで、よりよいプログラム作成をめざした実践や、生活や社会の中から問題点を見出し、解決にむけて取り組む実践が報告された。

討論では、実際の最先端技術を動画で紹介したり、学びを共有する時間を設けたりすることの有効性について意見交換された。

⑸　総括討論

「学習に対する子どもたちの意欲を引き出したり、高めたりするための問題設定や提示方法の工夫」について討論を行った。生物育成では多様な種類の土や肥料を準備し、自由に配合を工夫させるなど、子どもたちの主体的な学習を促す場面を大切にする必要があるという意見が出された。また、導入で最先端の技術などを紹介したり、身近な生活に密接にかかわる事柄と関連させたりすることが、子どもたちの意欲を高めることにつながるという意見が出された。

助言者からは、身近なものを教材にすることで、実生活に子どもたちの学びが生きてくるという助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　実生活につながる題材や問題の設定

⑵　人と人だけでなく、人とものとの対話など、多様な対話的活動を取り入れた授業展開

第10分科会【家庭科教育】

1. 全体を通して

子どもたちが自ら課題をもち、解決していくために、さまざまな導入の工夫がされた実践が報告された。

総括討論では「周りで起きていることを自分事としてとらえていくためには、身近なものから教材を見つけていくことが大切」「限られた時間数で、他教科と関連させたり、実生活に取り入れたりすることで、自ら行動できる力を身に付けていくことが大切」などの意見が交わされた。

2. 討論の内容

⑴　持続可能な社会の構築と実生活を関連させた実践

衣生活（2本）では、ファストファッションがどのようにつくられているのかを映像で理解した後、持続可能な衣生活を実現するために、自分にできることは何かを考える実践が報告された。消費生活と環境では、自分の買い物や生活の仕方を振り返って課題を見つけ、目に見える価値だけでなく、環境への影響や安全性にも目を向け、自分自身の生活に生かす実践が報告された。保育では、幼児へのおもちゃをつくることを通して、自らも地域の一員として積極的に活動する実践が報告された。

⑵　実生活における課題解決に取り組む実践

住生活（2本）では、実際に日光や加湿の影響を実験で確かめたり、ペットボトルを使った重ね着の実験をしたりすることで、課題を解決する達成感を味わい、これからの生活を工夫するための実践が報告された。食生活では、よくない朝食の写真や調理実習から課題を見つけ、よい朝食について考えを深め、家族が喜んでくれるおうちごはんのレシピを考える実践が報告された。

⑶　ICT機器を活用した実践

食生活では、栄養素や食材を調べ、弁当をつくる学習の中で必要なエネルギー量を求めるために、表計算ソフトを活用した実践が報告された。衣生活では、洗濯が必要な理由について、実際に体験して理解したことを、ICT機器を活用し、文字だけでなく図を使って「体操服お手入れマニュアル」としてまとめた実践が報告された。

助言者からは①実生活に生かすこと、体験して学ぶことができるとよい。また、習慣化するまで声をかけることも大切②無意識を意識化していくことが大切③「エシカル消費」など、話題になっていることを、教員が知っていないといけない④不易と流行をなくしてはいけない⑤プログラミング的思考、つまり段取り力を身につける⑥何を学ぶのか、授業のゴールを教員も子どもたちもわかっている必要があり、ルーブリック評価が大切であるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　限られた時間数の中での授業のすすめ方

⑵　持続可能な社会の実現にむけて、社会問題について考えさせるための視点の与え方

第11分科会【保健体育】

体　　育

1. 全体を通して

「体育でどのような子どもを育てるか、自ら考え行動する子どもをどう育てるか」を大テーマに、次の二点を研究主題として、発表・討論が行われた。

⑴　わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり

⑵　ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくり

どのリポートからも、技能習得をめざした取り組みやかかわり合いの方法、主体的に体育学習に取り組むためのさまざま

な工夫のある実践が報告された。

討論では、かかわり方の有効な手だてや、子どもたちが課題に向き合うためにどのような場をつくるべきか、教員のかかわり方などについて活発な意見交換がなされた。また、ねばり強く学ぶための教材や指導方法の工夫などについて、活発な意見が出された。

2. 討論の内容

⑴ わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり

「動きやゲームをたくさん行うことで自分の課題と向き合う機会を増やす」「基礎・基本となる動きを定着させてから応用的な動きを考える場を設ける」など、授業づくりの考え方について意見が出された。

討論では、「わかる・できる」ためには試合時間と回数を十分に確保することが大切であるとの意見が多く出された。また、その中で教員がどのようにかかわり、子どもたちに考えさせるのかが重要であることも確認された。「かかわる」については、子どもたちが必然的にかかわることが大切であることが確認された。そのために、個々の学びの共有方法やICT機器の活用方法について意見交換がされた。

助言者からは、学習方法の個別化と学習内容の個性化が重要な視点となるとの助言を得た。その中で子どもたちが「できる・わかる」を味わうことや対話的な活動が大切であるとの助言を得た。また、対話的な活動を行う中で、教員対ひとりの子どもではなく、教員対子どもたち全員となるようなかかわりの場を大切にしていくことの必要性についての助言も得た。

⑵ ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法の工夫をした授業づくり

ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法を工夫した授業づくりについては、「子どもたちが自らやりたくなる教材の選択をする」「モチベーションを維持できる声かけや場づくりをする」ことが効果的であるという意見が出された。

討論では、ねばり強く学ぶために主体的に学習に取り組む工夫が必要であることが確認された。そのために、子どもたちが楽しく学習に取り組めるような教材や、場の工夫について意見交換された。また、仲間に貢献したり、認めたりする態度を養っていくことでねばり強く学ぶことができるとの意見も出された。

助言者からは、子どもたちが楽しく学ぶために自己決定・自由進度の実践が増えているが、子どもたちに任せる部分とそうでない部分をはっきりさせる必要があるとの助言を得た。近年、主体的な学習の部分に焦点があたっているが、子どもたちはもっと教員に教えてほしいと思っているため、子どもたちが教員を必要とする場面では、教えることも大切であるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴ わかる・できる・かかわることを大切にした授業づくり

⑵ ねばり強く学ぶことをめざした教材や指導方法の工夫をした授業づくり

保　　健

1. 全体を通して

「子どもが生活の主体となるための保健教育」をテーマに、教材・教具を工夫した実践、子どもたちの主体的な活動を中心とした実践、学校内・外との連携を深めた実践などが報告された。報告を通して、健康に対する意識の高まりや、健康課題の解決にむけた実践力が着実に育っている様子を感じることができた。

2. 討論の内容

⑴ 心・命・性に関すること

自己肯定感や自己有用感の向上をはかるために、家庭や地域と連携するとともに校内で組織的に取り組んだ実践や、市内の養護教員が協同で作成した資料を活用して危機管理に取り組んだ実践が報告された。

討論では、子どもたちが主体的に学ぶための手だてについて話し合われた。自分の健康課題に気付くことができるように、事前アンケートの結果を示して課題意識をもたせることや、子どもたちどうしの学び合いが有効であるとの意見が出された。

助言者からは、見通しをもって年間指導計画を立てるとともにR-PDCAサイクルを取り入れることや、家庭だけでなく地域との連携を深めることが求められるとの助言を得た。

⑵ 保健・総合などでの指導のすすめ方

ワークシートを活用して自分の健康課題に気付かせ、家庭での取り組みにつなげた歯科指導の実践や、継続的な保健教育や毎日の健康チェックを通して、子どもの主体性を育んだ熱中症予防の実践、ICT機器の活用や専門家との連携を通して、自ら姿勢を改善できるよう働きかけた実践が報告された。

討論では、校内の連携をはかるための手だてについて話し合われた。職員会議で子どもたちの実態を発信することや、保健主事とよりよい連携のあり方を模索するなどの意見が出された。

助言者からは、専門家からの指導を取り入れることや、子どもたち自身が課題を探究して疑問をもつことで、主体的な学びにつなげることが重要であるとの助言を得た。

⑶ 指導方法・指導形態の工夫

ICT機器を活用して自分の考えを積極的に表現できるよう工夫し、コミュニケーションスキルを高めた実践や、栄養教員や家庭と連携した朝食指導の実践、年間指導計画を立て、生活習慣の振り返りを中学校区で継続して行った実践が報告された。

討論では、家庭との連携をはかるための手だてについて話し合われた。学校の取り組みを保健だよりで知らせることや、学校保健委員会に多くの保護者に参加していただくことが有効であるとの意見が出された。

助言者からは、実践内容を学校全体で共通理解することや、養護教員の専門性を生かした実践であるかを定期的に振り返

る必要があるとの助言を得た。

⑷　生活に生きる保健教育

グループでの話し合いやチェックカードを通して健康な生活について考えさせた実践や、視覚に訴える教材を活用して生活習慣の改善をめざした実践、子どもたちどうしのかかわり合いを大切にして心身の健康を育んだ実践などが報告された。

討論では、日常生活での意識化・行動化を促すための手だて、実践に対する評価方法について話し合われた。継続的な指導や声かけにより意識を高め、行動につなげることや、数値以外に担任や保護者から見た変容からも評価するとよいとの意見が出された。

助言者からは、生活習慣の改善には継続的な働きかけと家庭との連携が重要であることや、家庭環境など個別に配慮した取り組みの検討をすべきとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　子どもたちが自ら課題を見つけ、解決の方法を見出していく力を育むための指導・支援のすすめ方

⑵　他教科とどのように関連づけ、評価をどのように行うか

第12分科会【自治的諸活動と生活指導】

小　学　校

1. 全体を通して

「たくましく生きる子どもを育てよう」を主題にして、活発に討論された。

よりよい人間関係を築くために、認め合い活動や異学年交流を通して活動した実践が多く報告された。自分自身を見つめ、自ら課題を見つけて取り組むことで達成感や満足感を味わい、豊かな人間性を身につけた実践や、友だちとのかかわりを通して他者理解を深めた実践などが報告された。

これらの実践報告をもとに、子どもたちの活動のあり方や意義、実態のとらえ方、それらをふまえた教員の支援のあり方について熱心な討論が展開された。

2. 討論の内容

⑴　子どもたちの気持ちを大切にし、実態を把握した上で、よりよい人間関係を築くためにどのような活動を展開していくのか

学校生活における認め合い活動や異学年交流などを通して、温かい人間関係をつくり上げていった実践が多く報告された。

討論では、よりよい人間関係を築くためには、子どもたちの自己指導能力を高めることが必要であるという意見や、主体的に活動するための支援を工夫することが必要であるという意見が交換された。また、自分なりの目標や課題設定をするためにICT機器を有効的に活用し、互いの目標や課題を交流することの重要性も確認された。

⑵　心理的な背景や発達段階をふまえ、子どもたち一人ひとりをどのように理解し、支援していくのか

振り返り活動やアンケート調査などを用いた分析を通し、教員が子どもたちの理解を深めた上で、個や学級に適した自他理解を深める実践や、子どもたちどうしがかかわる具体的な実践が報告された。

討論では、発達段階に応じた認め合い活動を継続的に取り組むことの大切さや、子どもたちの自己有用感や自己肯定感を高めていく手だてについて話し合われた。また、さまざまな実践を行うだけでなく、教員が毎日子どもたちとのかかわりを振り返り、一人ひとりの子どもを価値づけていくことの重要性も確認された。

⑶　どのようにして、集団の質を高めていくのか

話し合いや係活動などを充実させた実践や、行事や学級の目標にむかって、主体的に活動できる子どもを育てた実践が多く報告された。

討論では、よりよい集団をつくるために、学級で理想の姿を共有する機会や、自信がもてない子どものために子どもたちどうしのつながりがもてるようにするための支援について話し合われた。

総括討論では、たくましく生きる子どもたちを育てるための活発な討論が展開された。認め合いとともに、自分や友だちの苦手なことを理解したり、自己開示したりすることも大切だということが確認された。また、教員が困ったときにどうするとよいか選択肢を多く与えることで、子どもたちが失敗から経験を重ねることができるようにすることが重要であると確認された。

助言者からは、生活指導は、話し合いや異学年交流などの機会だけでなく、授業の中で育てていくことが大切であること、人間関係を育てる対話を授業中に積極的に行うことで、認知能力も高めることができるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　発達段階に応じた自己理解や他者理解のあり方

⑵　主体的で継続的な活動の取り組み方

⑶　集団の質を高めるための活動のあり方

中　学　校

1. 全体を通して

「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに、活発に討論された。

主体的に学ぶために、自己存在感を大切にした実践や、生徒会活動や学級活動を生かしながら、個と集団の力を高める活動、家庭・地域と連携した活動を通して子どもたちの成長をめざした実践が報告された。

これらの実践報告をもとに、子どもたちの実態をふまえた支援のあり方について討論が深められた。

2. 討論の内容

⑴　子どもたちの気持ちを大切にし、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方

討論では、協力的・参加的、体験的な活動を学校生活の中に組み込み、その中で個や集団の課題を認識し、解決していこうとする集団づくりが大切であると意見交換された。また、学級力アンケートによって学級の実態を把握し、PDCAサイクルを学級活動に組み込み、その中で振り返りを共有して、次のステップに自分の意見が反映される経験を積む中で、子どもたちの自己存在感を味わわせることの大切さなどについて討論が行われた。

⑵　リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方

討論では、子どもたちどうしが問題を共有した上で、その解決にむけて話し合い、実践する取り組みを続けていくことにより、力を合わせて解決しようとする子どもの育成について話し合われた。また、一体感を高めたり、よりよい人間関係を築いたりするための生徒会活動や学級活動を生かした実践が報告された。

⑶　問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成

討論では、学校や家庭、地域とのつながりを深めることや、さまざまな関係機関と連携して取り組むことの大切さが確認された。また、地域や外部機関との連携や長期欠席の子どもの自立をめざした支援、防災教育などの実践が報告された。

総括討論では、「たくましく生きる子ども」を育てるために必要な手だてのあり方について話し合われた。たくましく生きる子どもたちを育てるためには、さまざまな活動を通して子どもたちに自信をもたせ、自己肯定感や自己存在感、自己指導能力を高めていくことが重要であると報告された。そのために、教員だけでなく、周りの仲間や地域の方、家庭の理解が大切であると確認された。

助言者からは、子どもたちそれぞれの特性や実態の違いを的確にとらえ、個に合わせたきめ細かな対応をしていくことが大切であるとの助言を得た。

さらに、子どもたちが意欲的に活動するために、教員や保護者は、子どもたちのがんばりを認めながら、継続的に取り組みをすすめることが大切であるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　子どもたちの気持ちを大切にし、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方

⑵　リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方

⑶　問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成

第13分科会【能力・発達・学習と評価】

1. 全体を通して

ICT機器を活用して、子どもたちが主体的・対話的で深い学びにむけて、授業に参加できるような手だての工夫、思考ツールやICT機器を活用した教具や表現活動の工夫の実践などが報告された。

また、子どもたちの主体的な学びを実現するために話し合い活動や振り返りを主とした授業展開を行った実践や各教科の特性を生かした指導内容の工夫についての実践などが報告された。さらに、家庭学習の様子をレーダーチャートにして可視化することで、子どもたちの主体性を効果的に高める実践、プログラミングを幼保小交流の単元のカリキュラムに取り入れた生活科の実践などが報告された。

2. 討論の内容

⑴　主体的に学ぶ子どもたちの姿とは

討論では、「子どもたちが主体的に学ぶ姿がみられるときは、子どもたちの『～したい』がたくさんある。そのためには子どもたちが『やりたい』と思える授業づくりが大切である」という意見が出された。「主体的に学ぶためには、子どもたちに対して均一の手だてではなく、『個別最適化学習』というキーワードのもと一人ひとりねばり強く取り組める課題を与える必要がある」という意見が出された。助言者からは、「主体的で深い学びとは、後のびする学びであり、今できることを一つずつやれるようにしていくことが大切。少しずつやっていき、その積み重ねで力をつけていくことができる」という助言を得た。

⑵　学ぶ喜び、わかる楽しさを感じる授業づくりをする上で大切にしていることとは

討論では、授業づくりをしていく上で、学級経営が密接に関係しているということについて話題があがった。子どもたちが安心して自分を表現できる学級、お互いの意見を聞き合い認め合うことのできるつながりがある学級、疑問を発信できる

雰囲気がある学級などの土壌をつくることが授業づくりにつながるのではないかという意見が出された。また、活動のゴールを教員がもち、活動の見通しを子どもたちにもたせ、達成感のある授業づくりを心がけていきたいという意見が出された。助言者からは、「ICT機器が普及して、対面のコミュニケーションをとる子どもたちが減ってきてしまっている。顔を見てのコミュニケーションをとり、自分の言葉で相手に説明する力を大切にさせていきたい。また、コロナ禍でできないことが多く、ストレスが多い現状をふまえ、子どもたちの興味を大切にし、できることを増やし、『やってみたい』と思う気持ちをもたせていきたい」という助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴ 子どもたちが「共有したい」と思える課題設定、教科における活動の中で必然性をもったICT機器の活用の仕方について
⑵ 教科全般におけるよりよい評価のあり方について

第14分科会【特別支援教育】

1. 全体を通して

「ゆたかに生きるための力を育む」というテーマのもと、16本のリポートが報告された。

子どもたちの教育的ニーズを把握し、学習意欲を高めるような学習活動や教材・教具を工夫した実践、人とかかわる力やコミュニケーション能力を高めるための実践、小学校と中学校と連携をめざした実践などが報告された。

2. 討論の内容

⑴ 学習指導をどのようにすすめるか

学習指導では、自立活動の指導による実践が3本報告された。動作法や筋力トレーニング法を取り入れた実践、キャリア教育を意識した実践、ICT機器を活用して生活改善をする実践が報告された。また、学習に占いを取り入れるユニークな算数の学習や、ピーマンづくりを通して働く意欲を高める作業学習による実践も報告された。一方で、教科・領域を合わせた学習指導では、生活単元学習を通して、伝える力や聞く力をのばす実践や、複数の教科に一人一台端末を活用する実践も報告された。

討論では、特別支援教育において、ICT機器を活用する上で苦労している点について共有がはかられた。また、画像検索をどこまで規制するか、一人一台端末の使い方でトラブルになる事例などの意見が出された。これに対して、学校全体での共有、保護者との連携の必要性が確認された。

一人一台端末は導入に使うとよいとする意見や、タブレット端末を使うことで紙に書くことへの抵抗感が強くなることについても報告された。

一方で、子どもたちの一人一台端末を使用したい気持ちに寄り添うことも大切であることが確認された。

⑵ 人とかかわる力を育てるための指導

教科指導を通して、人とのかかわり方を学ぶ実践や、特別支援学級と通常の学級、また小学校と中学校における交流を通して、礼儀正しい言葉遣いや適切な立ち振る舞いなど、子どもたちの意識改革をめざした実践が報告された。

討論では、人とかかわる力を育てるために「交流および共同学習」が大切であることが再確認され、異学年交流や異校種間交流、オンラインを活用した交流など、さまざまな交流の事例が出された。また、交流は特別支援学級と通常の学級の双方の子どもたちに意義深い活動を行うことが重要であり、教員主導で活動を考えるのではなく、子どもたちの思いを加味していく大切さが確認された。持続可能な交流のあり方についても検討された。

⑶ 特別支援教育をどのようにすすめるか

ソーシャルスキルトレーニングやユニバーサルデザインを取り入れ、主体的に学習をすすめる子どもの姿をめざした実践や、学年カンファレンスを重視した校内相談体制の構築をめざした実践などが報告された。

討論では、よりよい特別支援教育の実現をめざし、特別支援学級と通常学級の「垣根」を低くし、教員や子どもたちにとって風通しのよい関係を学校全体でつくっていくことの大切さが確認された。また、「子どもたちの困り感をどのようにとらえているか」という問題提起がされ、担任のみではなく、特別支援教育コーディネーターやスクールカウンセラー、医師や福祉関係者などと連携して、子どもたちの困り感をとらえていくことの重要性が確認された。

3. 今後に残された課題

⑴ 個々の子どもの得意な点にもとづいたきめ細かな自立活動の実践
⑵ ICT機器を活用した、教科指導や障がいによる学習上及び生活上の困難さの克服、子どもたちの実態などを考慮した実践
⑶ 人とのかかわりについての多様な実践
⑷ キャリア形成や自己理解につながるキャリア教育の実践

第15分科会【進路指導】

1. 全体を通して

基礎的・汎用的能力を育むための啓発的な体験活動を通して、望ましい職業観や人生観を育む進路指導の実践や、総合的な学習の時間や特別活動を中心に、各教科や学校行事など、さまざまな教育活動を通した実践、各学年で意図的に体験活動

を計画し、全校体制で系統的なキャリア教育の推進に取り組んだ実践、コロナ禍において、職場体験学習をはじめとした地域と連携した取り組みの実践が難しくなるなか、企業と連携し、子どもたちが考えたアイデアを商品化して販売するという実践などが報告された。

2. 討論の内容

⑴ 啓発的な活動や体験に対して、子どもたちの意欲を引き出し、系統的・継続的に取り組ませるための手だてについて

ゲストティーチャーや企業連携事業など系統的なキャリア教育の実践とその効果が報告された。コロナ禍だからこその工夫や今後、感染症対策が緩和されていったときにも、継続的かつ効果的な手だてがないか話し合われた。また、子どもたちの発達段階を意識した系統的な指導計画とキャリア教育における小・中連携が必要であると確認された。

⑵ 自己を見つめ、望ましい職業観・人生観を養うため、学校と地域がいかに連携をはかるかについて

地域の人材や企業を生かした啓発的な体験学習を通して、望ましい職業観や人生観を育む実践が報告された。感染症対策が少しずつ緩和されていく中で、どのように地域と連携をはかっていくかについて話し合われた。

⑶ 先を見て「生き抜く力」を育む、明確な目的をもったキャリア教育の計画をいかにして立てるかについて

各学年で連携して活動を計画し、学校全体でキャリア教育の推進に取り組んだ実践が報告された。「生き抜く力」を育むキャリア教育の計画作成には、小・中連携が必要であると確認された。

⑷ 各教科や総合的な学習の時間を通して、学校全体で共通理解し、四つの基礎的・汎用的能力を育成できるキャリア教育体制をいかにしてつくるかについて

四つの基礎的・汎用的能力を育成できるキャリア教育の実践が報告された。効果的なキャリア教育を行うためには、組織的に取り組むための協力的な体制づくりが必要であると確認された。

3. 今後に残された課題

⑴ 子どもたちが主体的に進路選択できる力を育む計画的な進路指導

⑵ 進路指導とキャリア教育の両立

⑶ 小・中・高の連携や、学校以外の関係機関との連携による進路指導とキャリア教育

第16分科会【教育条件整備】

1. 全体を通して

「子どもの学習権の保障のために」を主題に、ICT教育にかかわる教育条件整備や、情報通信技術支援員を活用した取り組みについての実践が報告された。

急速なICT機器の整備がすすんだ現状や、それに対する教員と子どもたちの意識調査の結果、今後の課題が報告された。

また、ICT機器を取り入れた授業や教員の業務の軽減と、それを補助する情報通信技術支援員との連携、今後求められる条件整備についての報告がされた。

2. 討論の内容

⑴ 子どもたちが意欲的に学ぶことのできる学校をめざして

学校における教育の情報化の現状について、ICT機器の整備状況、ICT機器を使用することに対する教員や子どもたちの意識調査の結果が報告された。また、昨年度の結果との比較からみられる変化や今後の課題について報告された。

討論では、特別教室の無線LANの整備状況、一人一台端末や付属品の故障や紛失の状況とその対応、予備機の状況など、各地区での実情について意見交換がなされた。

助言者からは、ICT機器の利用が増えているため故障などの問題が増えており、その対応を考えていかなければならないことや、ICT機器を使うのが苦手な教員への研修、子どもたちの学びが保障されるよう機器やソフトなどを充実させていくことなど、今後も条件整備をすすめていくことの必要性について助言を受けた。

⑵ 子どもがいきいきと活動できる教育条件整備

情報通信技術支援員の必要性や支援員に求めることへのアンケート調査結果、学級会の話し合いや、登校支援での一人一台端末を使った実践、情報通信技術支援員による授業の補助や業務負担軽減に関する取り組みについて報告された。参加者からは、デジタル連絡ツールの利用や、情報通信技術支援員の配置人数や役割など、各地区での現状について意見交換がなされた。使用している連絡ツールが市町村で違うことや、多くの地区で配置人数が足りていないことが確認された。

助言者からは、ICT機器の授業や業務での活用方法を考えていくことの必要性、情報通信技術支援員の増員とその業務内容を明確にしていくことの必要性などについての助言を得た。また、ICT機器を活用した家庭学習ができる反面、家庭でも学校の情報を得ることを負担に感じる子どもへの配慮の大切さについて助言を受けた。

3. 今後に残された課題

⑴ 特別教室配置の無線LANや、一人一台端末の予備機やその付属品のさらなる条件整備をすすめていくこと

⑵ すべての子どもたちの学習活動が保障されるように、教員のICTリテラシー向上のための研修の充実や、情報通信技術支援員の増員などの整備をすすめていくこと

第17分科会【過密・過疎、へき地の教育】

1. 全体を通して

実践報告を行ったいずれの学校も、小規模校・へき地校であることの利点や課題をふまえ、学校や地域の実態に応じた教育活動を行っていた。そして、各学校では、特色ある教育活動を展開するために、子どもたちに身につけさせたい力を明確にし、地域の「ひと」の思いにふれ、かかわることができるよう工夫をこらした実践が報告された。これらの報告をもとに討論が行われた。

2. 討論の内容

⑴ 子どもたちに身につけさせたい力を明確にし、大規模校・小規模校の特性を生かした教育支援のあり方

初めに、各学校の教育課程の編成について話題があがり、討論が展開された。伝統の中で積み重ねてきた実践や、地域とのつながりを育みながらすすめてきた実践が紹介された。いずれの学校もさまざまな地域の実態や社会情勢の変化を経て、よりよい教育活動を行うための教育課程へと深化してきたことがうかがえた。続いて、教育課程をより効果的なものに編成するための具体的な方策について討論がなされた。その中で、発達段階に応じた系統的な目標の設定や、各行事における振り返りシートの蓄積、キャリアパスポートの活用などをふまえ、教育課程を編成する必要性が示された。

助言者からは、教育活動活の継続や活動内容の精選・見直し、子どもに身につけさせたい力を明確にすることの重要性について助言を得た。

⑵ 過密・過疎、へき地における地域の「ひと」の思いにふれ、かかわる教育活動のあり方

次に、地域の特色ある教育活動について話題があがり、討論が展開された。高齢者とかかわりがもてる活動、地域の将来について考える行事などが紹介された。いずれも、人と人とのつながりを中心とした活動であり、それこそが各地域を築いてきたものであると感じられた。しかし、コロナ禍により活動の中止を決断せざるを得ないことも多く、地域とのつながりが途絶えかけているという主旨の発言も聞かれた。また、過疎地域・へき地においては、少子化による学校の統廃合もあり、さらに地域のよさが失われていく可能性についても懸念された。このような状況のなか、地域コーディネーターを活用し、子どもたちが地域のよさを発信する活動などを通して、地域に愛着をもてるよう子どもたちを育てていくことが必要であると話し合われた。

助言者からは、小規模校・へき地校として地域連携を推進し、地域の思いを実現につなげることが重要であるとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴ 子どもたちに身につけさせたい力を明確にし、大規模校・小規模校の特性を生かした教育支援のあり方
⑵ 過密・過疎、へき地における地域の「ひと」の思いにふれ、かかわる教育活動のあり方
⑶ コロナ禍、学校の統廃合など、諸課題を抱える中での地域と学校のあり方

第18分科会【情報化社会の教育】

1. 全体を通して

一人一台端末が導入され、それらを活用し、子どもたちが主体的・探究的で深い学びにむかう手だての工夫やICT機器を活用した表現活動の工夫などの実践が報告された。また、情報の共有・活用の実践や教科指導の中でICT機器を効果的に活用する実践、プログラミング教育についての実践が報告された。

2. 討論の内容

⑴ 子どもたちに情報モラルを身につけさせ、主体的に情報を活用・共有させていくためには、どのような学習活動をすすめていけばよいか

各学年の発達段階に応じた情報モラルやデジタル・シティズンシップ教育の実践、振り返りシートを用いて考えをまとめ、自分の考えの変化に気付くことで、最適解の方向を見出す実践などが報告された。

討論では、学校全体で情報モラルの学年ごとの系統、パスコードの管理方法について意見交換が行われた。

助言者からは、禁止制約をするのではなく、よき使い手になるための教育や探究的な学習を通して、単元全体で課題の設定、収集、整理・分析、まとめ・表現という流れがスパイラルに継続してスキルアップしていくことが大切であるとの助言を得た。

⑵ プログラミング教育において、論理的思考を培うためには、どのような学習活動をすすめていけばよいか

プログラミングソフトを活用したアニメーション、算数の文章問題の動作化、自動運転車のプログラムの作成や、アンプラグド教材などの実践を通して、どのようにプログラミング的思考力を育んだかが報告された。

討論では、カリキュラムとの関連や時間の確保、低学年での実践方法について意見交換が行われた。

助言者からは、バグの解消を協働的な学びだけでなく、個人でも解決が可能になる手だての必要性、どのプログラミングソフトでも汎用的に考えられるようにする思考力の育成が必要であるとの助言を得た。

⑶ 教科指導の中でどのようにICT機器を活用することが効果的であるか

図画工作で作品のイメージを作成したり、思考ツールでよさを伝え合ったりする実践、体育で動作を動画で確認したり、アプリの振り返りシートをもとに教員からのアドバイスをフィードバックしたりする実践、特別支援学級でのオンライン交流会やプレゼンテーション用ソフトを活用した実践などが報告された。

討論では、体育の授業での運動量の確保や、低学年での思考ツールの利用について意見交換が行われた。継続的な利用を行ったり、振り返りシートの形式を工夫したりすることで、入力にかかる時間を短縮できることが話し合われた。

助言者からは、改訂された学習指導要領は情報教育に親和性が高いこと、目的と方法の選択を十分に吟味すること、課題設定とツールの相性が大切という助言を得た。

3. 今後に残された課題

(1) 社会全体がSociety5.0にむかっている中でどのような子どもを育てていくか
(2) プログラミング教育における指導時間の確保や各教科との関連する取り組みについて
(3) 子どもたちが主体的・対話的で深い学びにむかうための手だて、ICT機器の有効的な活用方法について

第19分科会【読書・学校図書館】

1. 全体を通して

本への関心や楽しさが高められるように、学校や地域の図書を活用しながら、ゆたかな学びをめざした実践やさまざまな人と連携をしながら、よりよい読書環境の構築がなされた実践が報告された。

目的に合った本を選書したり、主体的に情報収集を行い活用したりする活動を通して、読書に対する価値を見出す実践が報告された。

図書館へ足を運ぶことが少ない子どもたちが、主体的に図書館にかかわることができるように、魅力ある図書館づくりを工夫した実践が報告された。

タブレット端末と本を併用し、子どもたちの主体的な取り組みを促す実践の報告もされた。

これらの実践報告をもとに、選書の仕方、学級や学年、全校への意欲の高め方など、活発な意見交換がなされた。

2. 討論の内容

(1) 読書活動

読書が自分の世界を広げ、自己理解につながることをビブリオバトルや役割読み、作家と出会ったり本を活用したりした授業を通して実感させた実践や、一人一台端末を利用して、子どもたちにおすすめの本をプレゼンさせたり、感想交流を促したりした実践が報告された。また、優れた表現に着目したり、伝える相手を明確にしたりしてポップやポスター作成を行った実践や、読書のよさを見出し、生涯にわたって読書に親しむ子どもたちの育成をめざした実践も報告された。

(2) 情報活用

図書資料や一人一台端末と思考ツールを組み合わせて情報整理を行った実践が報告された。

(3) 図書館運営・連携

オンライン検索と貸出を整備した実践や、さまざまな委員会活動やポップ・ポスターづくり、読書記録の作成など、「読書センター」としての機能を紹介した実践が報告された。

(4) 情報交換

一人一台端末を使った実践例について、情報交換を行った。「学習支援ソフト」の発表ノートでグループワークを使って、意見交換できること。「絵本ひろば」を使って、何を読みたいか困っている子どもに絵本を選びやすくできるようになることが紹介された。また、「WEBアンケート」を活用することで、読みたい本のアンケート結果をすぐに出せることについても、紹介された。

学級文庫の運営について、委員会の子どもたちが月に十冊と学年の先生が十冊選ぶ方法や、学期ごとに、学年で入れ替える方法があることも紹介された。

3. 今後に残された課題

(1) 図書にどのように出会い、人生にどうかかわるか。国語科以外の教科であったり、教科横断的な活動でも活用するための工夫
(2) 図書館活用に対して、学校図書館司書や司書教員だけではなく、学校全体で行っていくための工夫
(3) 発達段階や小中のつながりを意識して、「情報センター」としての学校図書館の機能を拡充させる工夫

第20分科会【総合学習】

1. 全体を通して

今日的な課題や身近な事象を探究課題として取り上げ、カリキュラムを自主編成し、主体的に取り組む子どもの育成をめざした実践が多く報告された。また、コロナ禍という状況においても、オンライン会議や学習支援ソフトを使用することで協働的な学びの実現をはかる実践や、思考ツールを活用することで、探究の課程の一つである整理・分析をめざした実践など、昨今の状況そのものを切実な課題として、新たな学びのあり方を模索する教員の熱意に感心させられた。

2. 討論の内容

(1) 子どもたちの声や願いを取り入れた総合学習にするための手だて

討論では、子どもたちの声や願いを取り入れるために、身近な話題を教材としたり、その教材との出会わせ方を工夫した

りする必要があるという意見が出された。これらの意見をもとに、これまでの実践における教材との出会わせ方について、発表者の経験を交えて意見が交わされた。さらに、現地取材や外部講師の派遣、体験的な学びを通して、子どもたちに目の前の課題を自分事としてとらえさせることが必要であることが話された。また、子どもたちのつぶやきや振り返りをくみ取り、還元していくことが教員に求められる姿勢であるという意見が出された。

助言者からは、子どもたちの思いや疑問こそが、総合学習の原動力であり、子どもたちが相手意識と目的意識を明確に認識することができれば、自主的に動き出す総合学習を行うことができるとの助言を得た。

⑵　総合学習のカリキュラムのあり方と、総合学習の持続可能性

子どもたちの声や願いを取り入れた総合学習とするために、カリキュラムが必要かどうかについて、討論が行われた。カリキュラムがあることで、総合学習への不安が和らぐ教員がいる一方、カリキュラムにしばられると子どもたちの実態に応じた単元展開が難しくなる。子どもたちの主体性を守るために、カリキュラムを実践の途中で修正するゆとりをもつことが、教員に求められている姿勢であるという意見が出された。

助言者からは、めざす子ども像こそがカリキュラム作成の原点であり、年間の指導計画とは異なることが確認された。また他学級が異なるテーマで総合学習を行うことも考えられるので、学年でめざす子ども像は、統一させる必要があるとの助言を得た。

⑶　総括討論

子どもたちに自分の生き方を考えさせる視点からのテーマづくりや授業展開の工夫について話し合われた。

子どもたちの実態からめざす子ども像を定め、子どもたちの関心や疑問を学習課題とし、声や願いをもとにした単元展開の重要性が確認された一方で、準備の時間に限りがあること、教員間での意思疎通が難しいことなど、総合学習を行っていく上での課題についても意見が交わされた。

助言者からは、子どもたちの声で学習をつないでいくために、毎時間の子どもたちの変容を評価する必要があるとの助言を得た。また、探究的な学習のサイクルを子どもたち自身で回すことができるように、教員自身が変化を恐れずにいなければならないとの助言を得た。

3. 今後に残された課題

⑴　持続可能な実践とするための教員間の連携や学校体制のあり方

⑵　探究的な学びを実現する手段としてのICT機器や思考ツールなどの有効な活用のあり方

特別分科会【特別の教科　道徳】

1. 全体を通して

小中合わせた16本のリポートでは、子どもたちの発言に応じた発問ができるよう、あらかじめ複数発問を用意し、考えを深められるようにした実践や、一人一台端末の機能を導入や話し合いの場面で活用した実践、表情絵やチャートなどを活用して思考の可視化を工夫した実践、ファシリテーター役をつくり、活発な議論から思考を深められるようにした実践、キャリア教育と関連させた実践など、さまざまな手だてをもとにした実践が報告された。討論は、「さまざまな工夫が、子どもたちの自己の生き方、人間としての生き方を深めることにつながるものとなっているか」に重点を置いて展開され、活発な意見交換が行われた。

2. 討論の内容

⑴　小学校の実践について

【思考の可視化】

言語化することが苦手な子どもも自分の考えを示すことができるように、登場人物の気持ちをハンドサインで表現させる実践や、互いの考えを共有するために、アンケートや表情絵、思考ツールを活用した実践など、話し合いや振り返りの場面で、意見を可視化することで互いの考えを共有しやすくするための手だてを取り入れた実践が報告された。

【実生活につなげる】

学級の実態や学校行事に合わせ、子どもたちが単元を選択して学習をすすめることができるようにした実践や、SNSを利用するという設定で、実際に操作しながら判断力を身につけられるようにした実践、内容項目の到達度をハートの数で示し、自分の生活を振り返られるようにした実践など、授業で学んだことを実生活につなげ、よりよく生きようとする姿をめざした実践の報告がされた。

いずれの実践にも、質問や意見が多く飛び交い、有意義な討論がなされた。子どもたちの考えをより確かなものにするため、今後も改善や工夫をしていく必要があると話し合われた。

⑵　中学校の実践について

【学びの振り返り】

道徳での学びを実生活まで継続し、授業だけで終わるのではなく、実生活の様子を振り返るための週訓を設定することで、「指導と評価の一体化」をはかる実践が報告された。

【導入や発問の工夫】

教材提示の仕方を工夫したり、投影的発問を投げかけたりすることで、問題意識を生み出し、自分事としてよりよい生き方について考えることができるようにした実践が報告された。

討論では実践報告だけでなく、ICT機器の具体的な日常の活用方法や多面的・多角的な考え方、ローテーション授業の実践方法についても意見交換がなされた。

3. 今後に残された課題

⑴　自分事として考えさせるために、子どもたちの心の奥底にある思いの効果的な引き出し方。思いやりや友情などの内容項目に対して、子どもたちだけでなく、教員も一緒に考えることで、子どもたちが新たな価値観を発見し、自己の生き方を深められるような授業のあり方

⑵　ICT機器の活用における、各種アプリの長所と短所を見極めた上での活用方法。対面で議論を行うよさを鑑み、子どもたちがじっくりと考える時間を設けて、活発な議論ができるようにする授業展開